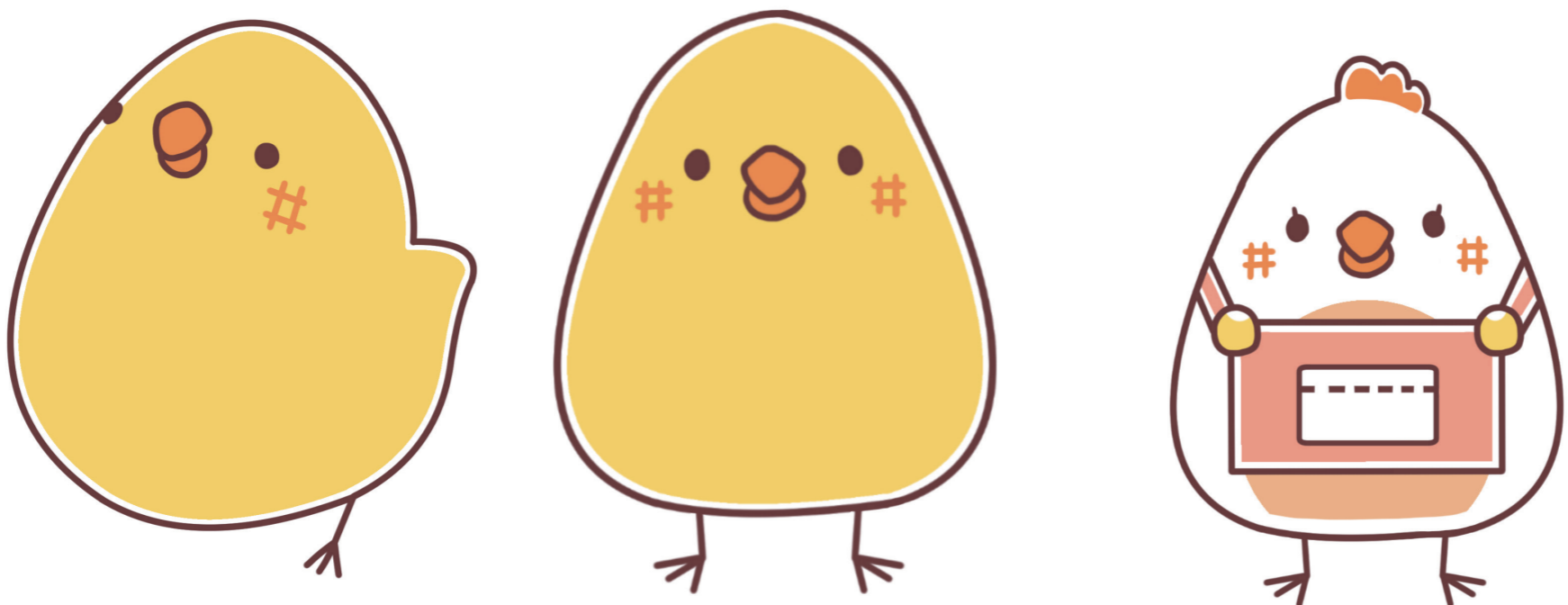


# ピヨ太のひよこ



文／久保湧雅

絵／近藤彩加

よく晴れた日のことです。  
ひよこのピヨ太はお散歩に出かけることにしました。  
玄関を出ようとするとき、

エプロンをかけたお母さんがパタパタと駆け寄ってきました。  
「待って、ピヨ太。ちょっとおまんじゅうができたの。」

おやつにもっていきなさい」

お母さんはひよこの形をしたおまんじゅうを、ピヨ太に渡しました。

「わあ、おいしいわー。ありがたうお母さん。行ってきます」

ひよこのピヨ太がうきうきした気持ちで歩いていこうと、

フクロウのおじさんと会いました。

「やあ、ピヨ太くん。いい天気だね」

おじさんは大きなあくびをしながら言いました。

「おはようございます、フクロウのおじさん。眠そうですねっ」

「あ、うっしょも眠いよ。」

夜の間に、この森でけんかが起きないようについ

ずっと見張っていたからね」

「おしかわねます」

ピヨ太はフクロウのおじさんをねぎらって、頭を下げました。

「そうだ、ピヨ太くん。」

わしが寝ている間に、けんかが起こったら、

君が止めてくれないかい」

「はい、がんばります」

ピヨ太は元気に答えました。

フクロウのおじさんと別れて、

ピヨ太はまた歩き出しました。

丘の上へのぼった時です。

どこからかけんかしている声が聞こえてきました。

「やい、ウサギー！ 僕が先にそのリングを見つけたんだぞ！」

「だめよ、リスくん。私が先に拾ったのよ」

リスくんとウサギさんの間に

真っ赤なリングが一つ置かれています。

どうやら二人は、一つしかないリングで

言い争っているようです。

「待って二人とも。けんかはよくないよ」

二人の間に入ると、リスくんはピヨ太を見て言います。

「だって僕が先にリングを見つけたのに、」

このウサギったら横取りしようとするんだ」

リスくんはふわふわのしっぽを振りながら言います。

「私が先に拾ったんだもの。このリングは私のものよ」

リスくんの言葉に、

ウサギさんは耳をピンと立って言い返します。

「なんだよー」

「なにやー」

そういつてリスくんとウサギさんが立ち上がった拍子に、

リングはコロコロと坂を転がり始めました。



「あ、リンゴが」  
ピヨ太たちはあわてて追いかけてましたが、坂を下っていくリンゴはとっても早く、とっつと見えなくなってしまうました。

「なにやってるんだよ、ウサギ」  
「あなたが悪いんでしょリスくん」  
「まあまあ二人とも。ちょっと落ち着こっつよ」  
ピヨ太は、今にも取っ組み合いのけんかになりそうな二人の間に入って二人をなだめます。そして、ピヨ太はけんかをやめさせる方法を一生懸命考えました。

「あ、わかったー!」  
「何がわかったっていつんだよ」  
「けんかの原因だよ。二人ともお腹が空いてるんでしょっ?」  
ピヨ太はそう言いつつ、

懐からひよこの形をしたおまんじゅうを取り出しました。

「何だいそれは?」

「お母さんが作ってくれたおまんじゅうだよ。」

「すごくおいしいんだ。一緒に食べようよ」

ピヨ太はおまんじゅうを三つに割って、

自分とリスちゃんとウサギさんで分けました。

「あらまあ、とっても美味しいわ」

「本当だ。優しい味がするぞ」

「そつでしょっ?」 お母さんはお菓子作るの上手なんだ

三人はあっという間におまんじゅうを食べ終わりました。

そしてリスちゃんとウサギさんは顔を見合って言いました。

「ウサギさん、ごめんなさい。僕が欲張りだったよ」

「私の方こそ、リンゴも仲良く分けていればよかったのね」

二人は自分の行いを反省して、そしてお互いを許しました。

「よかったよかった。これで一件落着だね」

「うん、ピヨ太もありがとう」

「ありがとうね、ピヨ太くん」

「どういたしまして。それじゃあ、また」

そつ言いつつ、ピヨ太はまた暖かな森の小道を歩き始めました。

